

地の塩、世の光として共に生きる

吉 岡 康 子

マタイによる福音書 5章13～16節

ローマの信徒への手紙12章15節

青山学院女子短期大学創立70周年となる2021年のNHK大河ドラマ「青天を衝け」の作者は、青山学院女子短期大学芸術学科の卒業生、大森美香さんです。2月14日の第一回に、主人公の渋沢栄一が子ども時代に母から「あなただけがうれしいだけでなく、みんながうれしいのが一番なんだよ」と教えられる場面がありました。この言葉は、やがて自分だけではなく、皆が幸せになることを目指した渋沢の生き方の礎となった言葉であり、またこのドラマのメッセージとして様々な場面で取りあげられます。これは私たち青山学院女子短期大学が大切にしてきた聖書の御言葉「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい」(ローマの信徒への手紙12章15節)に基づくメッセージでもあり、また青山学院スクール・モットー「地の塩、世の光」にも通じるメッセージでもあります。

「共に生きる」ということを私たち女子短期大学はあらゆる場面で大切にしてきました。教職員と学生、学生と学生が、近くてあたたかい関係の中で共に学び、共に苦勞し、共に喜び、共に泣き、そして共に祈りつつ歩んできました。神さまが女子短期大学70年の歴史に私たちを学生として、教職員として加えてくださり、このように皆さんと出会いを与えてくださったことを感謝しております。神さまが私たちを選んで出会わせて下さいました。それぞれ地域で、それぞれの歴史を生きてきた「他人」だった私とあなたが「隣人」となり、この「青短」で「共に生きる」「共に祈る」「共に学ぶ」「共に働く」ことが

出来たことを感謝しております。

「共に」というのは分かち合うことです。私は牧師としてこれまで多くの方の看取りに関わってきました。その時にいつも思われることは、本当に幸々な人生を生きた人は、共に生き、共に分かち合うことができた人だということです。多くのものを得た、持っていたというのも悪くはありません。しかし、本当に幸せで豊かな人生というのは、いかに多くを得たかではなくて、与えられたものをいかに共に生きる仲間と分かちあい、シェアできたかということによるのです。「共に喜び、共に泣く」ことをとおして、私たちは本当に幸いな人生を生き抜くことができるのです。

そして「共に喜び、共に泣く」幸いな人生を生きるための指標として、私たちは主イエスのお言葉をいただいています。青山学院のスクール・モットーである、マタイによる福音書のイエス・キリストの御言葉です。

主イエスは、私たちに向かって「あなたがたは地の塩なのです」とおっしゃいました。そしてまた「あなたがたは世の光です」と言われるのです。塩、光であるとはどのような事なのでしょう。塩は、私たちの生活にとって大事なものです。人が生きていくためには塩は欠かせません。腐敗を防ぎます。「光」もまた私たちの生活に欠かせないものです。特に感染症による様々な困難の中で人の心も不安の闇に閉ざされている今こそあなたは「地の塩」として味わい深く生きよ、腐敗を防ぎ、清く生きよと勧められています。また、暗い、暗いと言う前に、自らが光となって闇を照らす存在であれ、と主イエスから呼びかけられているのです。

塩はいろいろな働きをします。料理に「塩気」をつけます。ほとんど全ての料理には塩が必要です。最後の仕上げにも塩が使われます。料理が上手になるため、そして良い料理人・専門家になるためには「塩加減」を長い時間かけて覚えなくてはなりません。それだけ塩は大切な役目を果たします。けれども塩をそのままなめたら、とてもしょっぱくて食べられません。料理の中にうまくつけて、塩の形がなくなって、そしてよい働きをします。もし塩が固まりで入っていたら、塩辛くて料理はおいしくありません。

光もまたそうです。ろうそくは自らを削って光を灯します。灯火を入れ物の中に閉じ込めておかなければ、窒息して自らの命も失ってしまいます。塩も光もいつも他者への働きかけの中で存在し、意味を持ちます。他者に働きかけ、共に生きたその時に、さらには他者のために自分を捨てた時に、私たちは相手に味をつけることができ、また、塩としての使命をまっとうする事ができるのです。またろうそくが自らの身を削って灯火を輝かせるように、私たちも自らが灯火となって暗いこの世を明るく暖かくする使命を神さまからいただいているのです。

これは「自分が、自分が」と自分の味、自分のやり方ばかりを主張する生き方とは正反対です。このような生き方ができるのか、と思うかもしれません。出来るのです。イエス・キリストを知り、信じるならば出来るのです。私たちの罪を十字架によってきよめてくださったイエス・キリストは、破れに満ちたこの世界を十字架の血によってきよめてくださったのです。敗れに満ちた私の人生に深い味わいをつけてくださる方なのです。また、光を与えてくださるのです。この主イエスが、私たちに「あなたがたは地の塩である」と言っておられるのです。「わたしがあなたの罪をきよめ、あなたの人生に生きる意味を味つけている。それゆえあなたがたは地の塩である」と言われるのです。「あなたがたは地の塩である。あなたがたは世の光である」とは、主イエスの命令ではなく、恵みの言葉、福音なのです。

青山学院女子短期大学ではこの10年間東日本大震災、あるいは熊本地震などの被災地への支援ボランティアを継続してきました。短大として20チームを派遣し続けてきました。今まで延約400人の学生たち教職員たちがこの活動に参加し、「被災地」の現地に伺って、多くの方々と出会い、多くの方々からたくさんのことを教えていただきながら歩んできました。大震災、大津波、また現在の災害である感染症との戦いの痛みや傷をとおして、「絆」という字が「傷」という言葉を含むように、悲しみやつらさや痛みを通して癒しあうことができることを学んできました。「私」が生きるから「私たちが共に生きる」、共に生かされていることを感謝し、深く覚えながら歩んできました。10年前、東日本

大震災の被災地での学生ボランティアを組織し、派遣する際に最も大きな協力を頂いたのが、本学の同窓会ならびに卒業生の皆さんでした。迅速に現地での状況を把握し、支援を届け、ボランティア学生たちの活動を支えるために現地へ赴き、現役学生と卒業生が力を合わせて汗を流しました。これは決して当たり前のことではありません。この学び舎でそれぞれがそれぞれの場面で培った「地の塩、世の光」として共に生きる底力が発揮されたと思われました。

「暗い暗いと不平を言う前に、進んで灯火を掲げましょう」これは古くからキリスト教会に伝えら、受け継がれている言葉です。確かに2021年の今、私たちの周りには様々な暗さ、不安、問題があります。しかしご自分のすべてをささげて、地の塩となってくださり、また決して消えない希望のともしびとなってくださった主イエスに従って、私たちは今こそ「光の子」として共に進んで行きたいと心から願います。愛されるよりも愛することを。理解されるよりも理解することを。ゆるされるよりもゆるすことをとおして、私たちは本当に強い、喜びに満ちた人生を歩む事が出来ます。そのための力をこれからも神様が与えてくださることに期待しながら、主イエスの御復活の力に照らされて、今共に踏み出していきましょう。

(2021年3月13日 青山学院女子短期大学70周年記念式典 感謝礼拝説教)